支局長からの手紙

企業とスポーツ

社会人野球日本選手権大会で和歌山箕島球友会に声援を送る松源の社員ら＝大阪市西区の京セラドーム大阪で10月31日、高橋祐貴撮影

今秋、京セラドーム大阪（大阪市西区）で開かれた第41回社会人野球日本選手権大会（毎日新聞社、日本野球連盟主催）は、日本生命の優勝で幕を閉じました。2年ぶりに出場した和歌山箕島球友会は、1回戦でNTT東日本に敗れ、念願の初戦突破は来年以降に持ち越されました。

箕島球友会の試合があった10月31日、スタンドでは、選手の大半が所属するスーパー「松源」の応援団約300人が有田市民とともに声援を送りました。兼田守社長（60）は「ノンプロ（企業チーム）の壁は厚いなあ」。これで4回目の初戦敗退となりましたが、支援する松源の姿勢は変わりません。

社会人のスポーツ界では、企業の撤退が相次いでいます。野球だけみても、日本野球連盟に登録する企業チームは1963年に237ありましたが、今年4月現在で86まで減少しました。一方で、複数の企業や個人が支援するクラブチームは3・5倍の268に増加しています。

松源は、箕島球友会の選手23人を雇用しているほか、社内に相撲部、ホッケー部、軟式野球部、陸上部があります。相撲部が最も古く、創業者の松本源蔵氏らが1969年に創部。実業団チームでは全国的に知られていました。

高校、大学と相撲部だった兼田社長も、誘われて77年に入社しました。現在の岡山県真庭市出身。高校時代に出場した黒潮国体（71年）で和歌山市内の民家に泊まり、住人らから熱い声援を受けて感激した経験があるそうです。

松源がスポーツ選手を支援するのは、こうした経緯に加えて人材確保の面もあります。兼田社長は「スポーツをしている連中はへりくつを言わない。目標を立ててクリアしてきた経験がある。達成感の積み重ねは、人間力という点で大きい」と言います。

選手たちは一般社員と同様に仕事をこなし、それ以外の時間で練習をしています。勤務時間などが優遇される企業チームに比べると厳しい環境ですが、引退後は会社の主要なポストで活躍している人が目立ちます。

兼田社長は「今の自分があるのは相撲があったからこそ。だから恩返しをしたい」と話します。今秋の和歌山国体には松源の選手たちも出場し、兼田社長は相撲の大会運営を担いました。スポーツ支援を通して地域に貢献し、地域と共生していく。新たな企業スポーツの鍵はそこにあるような気がしています。

【和歌山支局長・坂口佳代】